

信樂釈

仏教の全て

すでに、如来本願の「至心」について論述し終り、これより「信樂」について味読してゆくことになった。憶うにこの信樂の二文字こそは、第十八願の中心となるべき重要な聖語である。この二文字あるが故に、十八願は十八願たり得るのである。即ち次の十九、二十の両願を十八願に対比すれば、

第十八願——至心、信樂、欲生

第十九願——至心、発願、欲生

第二十願——至心、廻向、欲生

とあって、至心及び欲生の文字は十八願と同様である。しかも中間の文字が、信樂、発願、廻向と変わるによつて、至心及び欲生の言葉の意味すらも変化せしめるのである。即ち、同一なる至心も、十八願にあつては、如来の真実であり、十九、二十願にあつては、衆生の発す真実である。欲生も、十八願にあつては、如来の衆生に向かつての廻向であり、招喚の勅命であるが、十九、二十願にあつては、衆生より如来への廻向であり、衆生より如来への歩みよりである。

かく考へる時、畢竟、十八願をして、如来久遠の真実を開顕せるものたらしめるのは、唯、この「信樂」なる二文字あるがためである。唯に十八願の眼目であるのみならず、四十八願をして四十八願たらしめる、生命そのものであり、唯信独達を主張せられたる聖人の信境よりすれば、一切蔵経、八万四千の法文を知ると雖も、若しこの「信」なければ、薪に油をさして、火を点ぜざるが如く、龍を描いて眼を入れざるが如く、遂に学ばざるに等しいのである。信こそは実に、仏教の全てであると言つても差し支へはないのである。しかして、信樂の何たるかは、親鸞聖人によつてはじめて、闡明されたと言つても過言ではない。我等は今更に、合掌の中に、信樂について聖人に聞かんとするものである。

如来の全て

聖人は、信卷の信樂釈において、

「次に信樂と言うは、則ち是れ、如来の満足 大悲 円融 無碍の信心海なり。」と断定せられた。これを表示すれば、

満足

大悲

信樂とは・・・如来の 信心海なり。

円融

無碍

即ち我等がもし、他力の信樂に至るに先だつて、一歩足を他の宗教にふみ出して「信心」について聞くなれば、如何に聖人の世界が他と異なるものであるかを知ることが出来るであらう。

おそらく宗教であるならば、信心を語らぬものはないであらう。しかして、全ての宗教に於いては、「信心」とは、神又は仏に對して、全我的な態度を我よりとることである。したがって、その信心において、その対象に求めんとするものが与えられない場合は、「信心が足りない」の遁辞のもとに教役者は逃げ得るのである。しかして、その宗教においては、信心は、人より神に捧げる真心であり、それに対して本尊はその求むるものを与えるのである。

しかるに聖人の積によれば、信樂なる世界は、衆生の持出す何もものでもなく、衆生の如何なる働きかけでもなく、全く「信樂とは……如来の……信心海なり。」であつて、全く如来心そのものの全てである。即ち如来心をその相において尋ねんか、如来心の全ては、唯、これ「信樂」である。

しかして、それは海の如く、無限絶対なる廣大無辺の心なるが故に、「信心海」と云われるのである。

信心海

まことに信樂こそは、廣大無辺なる如来心そのものである。南無阿彌陀佛の全てが、大心海そのものに外ならない。即ち、如来の生命そのものが信心なのである。

されば、信を成就し、顕現し、廻向するものも、決して衆生ではなくて、清淨真実なる、如来の願心より發起せしめられるのである。我等は宗教が、人間が大地にあつて生きる、その生活に即するものであることを知っている。即ち信は徹頭徹尾、衆生に於いて發起し、意識し、体験し、獲得する意識の世界ではある。しかもその信は、2 実に衆生に属するものでなくて、如来の全てであることを聞く時、我等は、救いの意味を知ることが出来る。

我等衆生は煩惱より外に持たぬものである。罪悪生死の海そのものであつて、信心なきものである。その業苦より外なき衆生が、如来の全生命たる大信心を恵まれる事によつて、救われるのである。

満足

如来の信心海そのものを、具体的に示されたる第一の文字は、この「満足」である。満足とは如何なる意味であるか。

今「満足」なる文字の源を尋ねれば、遠く、彼の『浄土論』の、「莊嚴不虛作住持功德成就」を説ける偈に、

觀佛本願力	佛の本願力を觀ずるに
遇無空過者	遇うて空しく過ぐる者なし
能令速満足	能く速に
功德大宝海	功德の大宝海を満足せ令む

とあり、我等はここに、救いの根本を現はせる重要な文字として、満足の文字を發見すること出来る。更に又、行巻において、經文を引用されたる後の聖人の御私釈、彼の有名なる破闇満願の文において、

「爾れば、名を称するに、能く衆生に一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を見てたまう」

と述べられたる文字を、聖人の満たされたまえる領解を顕わされたる重要な文字として受け取る。

以上の二文字において知らるることは、「満足」あるいは「満てる」の文字が、全て衆生の志願を満足せしむることを現わされたことである。しかし、前の『浄土論』においては、如来の本願力に遇う者は全て「功德の大宝海」を満足すること、即ち、如来の廻向によつて、如来の大善大功德、絶対善を領得することを示されたものであり、後の御私釈の文は、我等が、信一念において、根本志願、即ち一切の志願を満足し、やがて、往生成仏の志願を満足することを、現わされたものである。

しかし、この二方面よりの表現は決して根本的の相違があるのではない。即ち、現当二世にわたつて、正定聚より滅度への往生を満足成就することが出来るのは、その根本において、如来本願力によつて、功德大宝海を廻向せられるが故である。

しかし、かかる衆生の満足が成就するのは、如来の本願力によるのであるが、しかし衆生の満足が如来によつて成就するものであるならば、衆生が満たされるに先だつて、如来そのものが、満足し満たされてあらねばならない。かく如来の満足を語るものが願行成就の正覚である。

如来が正覚を成就するとは、長時永劫の修行と、本覚真如法性との一致融合の満足を顕わされたものである。実に如来こそは、正覚の一念において、大功德において満足せられたるものである。この如来の満足を外に、大信心はあり得ない。即ち、信楽とは、かかる寸毫も欠けたるなき、如来心の全てを言われたるものである。

しかし、我等がよく自力信心の不安動揺を超え、一切の疑心暗黒を打破して、金剛不壊の信心を体験し、獲得することが出来るのは、真実の信そのものが、如来の金剛心そのものであつて、衆生のはからいを微塵だにも、加えることを許されない、それ自体一切を超えて実在する、如来の満たされたる大生命そのものだからである。

我等は静かに如来の名号を聞くべきである。名号を聞く時、「信楽と言うは、即ち是れ如来の満足……の信心海なり。」佛の満足を外に、我等衆生の満足なく、我等において一念発起する大信心そのものは、直ちに如来満足の信心海そのものの廻向顕現であることを、領解し得るのである。

更に深く考えなくてはならぬことは、衆生は貪欲より外に心を持たぬものである。欲を生命とする衆生は、欲の満足以外には満足を感得ないものである。衣・食・住において、男女の性問題において、享楽において、その他、五欲こそは衆生心の全てである。

しかるに信楽の天地における満足とは、決して本能的煩惱性の充足、満足ではないことである。如来は我等に貪欲の満足を幸福とは教えない。煩惱性への無限の満足は、生活の頹廢であり、生死への流転であることを教える。されば、仏に向かつてすら、自身の楽を求むることをば、微塵ほども許さない。かかる不純なるものの混入することをこそ、雑行雑修自力として嫌い捨てんことを命ずるのである。即ち真実の信心は、信心自体において、満たされ、満足し、喜ぶ心である。

凡そ、我等のおこす信心より不純分の混入を取り除くために、宗教発達の過程において、幾千年の年月を要したと言つて差し支えない。しかも聖人において、はじめて、あらゆる凡心の混入を捨去したる純粹なる信心が、闡明せられたのである。しかして、われらに一生の求道過程においては、この間の一切の世界を超えなくてはならない。これ即ち我等に与えられた課題であり、又、先覚の教えを聞かねばならぬゆえんである。

されば、信楽とは、かかる一点濁りなき、清浄至純なる、紅き血潮の流れそのものである。しかも衆生心が煩悩より外に持たぬものであるが故に、かかる清浄至純なる信心の流は、浄土の如来心、そのものでなくてはならない。

信心は言いかえると仏性である、智慧である、如来心である。故に、はじめて、貪欲の対象ならぬ功德大宝海においてこそ、満足を感じるのである。貪欲心は決して絶対善などを求めはしない。

真実とか道とか法とか功德とかを喜んで満足する心は、即ち如来心そのものである。されば、如来の大行は、我等の自覚を通して「一切の無明を破」さなくては、「能く衆生は一切の志願を満てたもう」ことは出来ない。志願満足とは、絶対人格の成就即ち成仏の志願、我等においての第一義的志願そのものである。

満足とは、「真如一実の功德宝海」に於いてのみ、用いらるべき文字である。

以上、「信楽」の世界を、「満足」なる文字の上に発見してきた。真の信楽とは満足の信心海である。如来心の満足がそのまま衆生心の満足となるのである。

菩薩も満足を求め、凡夫もまた満足を求める。法蔵菩薩は三誓偈において、「願慧悉く成満して、三界の雄とならん」

と誓われた。本願を成就し、智慧を満たして、三界の雄、即ち仏陀たり得たいとの願いである。願は智慧であり、智慧は本願である。願慧を成就し満足することは、即ち成仏することである。菩薩はこの願をただ満足しようとする。

しかるに、凡夫は満足を求めて外にものを追求し、欲心の満足にのみよつて満足を得ようとする。しかして欲の根底は我である。私の命ずるがままに、満足や自由を求めつつ、しかも、欲や我によるが故に、ますます満たされることなき、不満、不平、愚痴に墜ちてゆく。五官の欲は満たされことを求める。しかも満たされたる後には必ず飽きを感じ、やがて、嫌悪の情をともなう。美食になれた者は、如何なる美味にも満たされなくなり、粗品に対しては、不平以外の何ものをも持たなくなる。男女の性生活にしてもし乱淫に至れば、その生涯をして不真面目のものたらしめ、正しい夫婦生活すら破壊してしまう。

しかし、仏陀の教えは決して極端なる禁欲生活の実践ではなかつた。むしろ仏陀は禁欲苦行をすてた。特に親鸞聖人は、自ら肉食妻帯を断行し、その煩惱満足の天地に、しかも、それに溺れきらざる中道、白道を歩んでゆかれた。

我等は悪業の現行において、煩惱自身必ず、煩惱性の放逸無漸の生活が衷心の願を満たさないことを知らしめる。我等は煩惱の満足の後、依然として満たされない、灰色の曠野に自己を見い出さずにはいられない。

真実の満足はただ信心の智慧の世界にのみあることを知るのである。

大悲

「信樂と言うは、則ち是れ、如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。」

満足の次には「大悲」の文字を発見する。信樂とは「如来の……大悲……の信心海である。」大信心とは、そのまま、如来の大悲、海の如く広大なるを言うのである。

由来、仏教においては智慧と慈悲とは分つべからざるものとして説かれた。智慧をはなれて慈悲はなく、慈悲をはなれて智慧はない。仏教が単なる哲学でなく、思想でなく、あくまで実践の法であることは、その特質でなくてはならない。しかして「慈悲」は赤き血の流れであり、熱き生命の躍動である限り、ただ、単なる哲学的批判や判断によつては知ることの出来ない、体験の世界であり、直観の天地である。

釈尊は、智慧によつて、天地の法、即ち真理をきとり、法身を以て我なりと感じ、それ故に一切衆生海の苦悩に対して大慈悲をおこし、一切衆生は我が子なりと感じられた。この智慧と慈悲とが、仏陀の絶対人格の内容となつて、その正覚を成就せしめたのである。一切衆生を見ること一子ラゴラの如しとは、釈尊の衆生に対する全てであつた。すでに釈尊がそれであつた。何らかの相によつてこの風光が漲みなぎっていない以上、仏教とは言われない。

衆生の現実

しかるに、生死海の衆生は一人として慈悲に生きる者はいない。一切衆生は慈悲に5生きないで、「愛」に生きる。愛は必ず憎悪持つ。愛憎、瞋憎の火の河と、貪愛の水の河に溺れて、しかも、常没流転していることすら知らない。この愛憎、瞋憎の中にごめきつつ、しかも仏教的生活などと自惚れるに至つては、言語道断と云うべきである。

浄土教的な歩みはここからはじまる。和讃に言く、

「無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは 高峰岳山にことならず。」

これ親鸞聖人の悲歌である。愛憎違順……愛か、しからずば憎、憎か、しからずば愛、愛すべからざるに愛し、憎むべからざるに憎む。愛と憎を奪えば生活内容のなくなる者、即ち凡夫である。しかも愛を是なりと肯定し、瞋憎の炎に燃えて、自他を焼きつつ、いよいよ以て正しとなす。無明煩惱しげくして、塵数の如く遍満し、高峯岳山の如くに群り起るもの、凡夫の煩惱生活ではないか。非仏者、非仏教、非道義、無慈悲、無漸放逸……ここに、古今の聖者の行き詰りがあつた。特に、道綽、善導、法然等の諸聖は血の滲むが如き内観自証の世界に至られた。更に、我が聖人は、「小慈悲もなき身にて……」と、身をもつて「地獄一定」の自己を発見せられた。

聖人のみならず、真剣なる求道者は必ず、貪愛、瞋憎の、無慈悲なる自己を発見して、悩まざるを得ないであろう。

聖道より浄土へ

しかるに、かかる行き詰りは、一切の真剣なる求道者を浄土教的転廻へとつれて行った。覺りより救済へ、自力より他力へ、その他力の世界においては、慈悲について再検討せられ、智慧について再認識される。即ち、自ら発す慈悲によって一切衆生を救う前に、南無阿弥陀仏によつて、まず自ら救われる。しかし南無阿弥陀仏は、大慈悲そのものである。まことに慈悲心とは、個々の衆生のおこすものではなくて、一切衆生を超えたる如来心の全てである。衆生心ではなくて、仏心である。生死界より湧出するものではなくて、涅槃界より等流して、一切衆生に注がれる生命そのものである。即ち如来の大悲は、生死海の苦悩の衆生においておこりはする。しかしその顕現の根源は、涅槃であり、如来である。

慈悲を解釈して「抜苦与楽」といわれる。即ち慈悲はあくまで苦悩を対象としておこるものである。苦悩のない所には慈悲はおこらない。如来の大悲は、ただ衆生の苦悩においておこり、苦悩を転じて衆生を大楽に住せしめんとする大願業力となる。

大悲回向

まことに大悲は衆生の苦悩よりおこる。苦悩よりおこるが故に、衆生の苦悩を置いて外に、そのはたらきかけるところを持たぬのである。されば大悲は苦悩のただ中において感ぜられ、体験せられる。

「信楽と言うは……如来の……大悲の信心海なり。」

如来の大信心海はただ大悲を内容とする。南無阿弥陀仏のすべてが、大悲そのものである。されば、真実に信心を得たるものは、我、信を得たりとは考えないで、かえつて如来の大悲に向かつて帰命し、合掌するのである。

本願他力の信心は、衆生より発起するものでなく、如来の本願力によつて起るものであるならば、信心とは如来の大悲のすべてであるとの領解こそ、一番正しい仏に對する帰依でなくてはならない。

しかるに我等は昔よりの「お慈悲を頂戴する」との一般同行の声に、一種の嫌味を感じるのは何故であらうか。おそらく、それは大悲に帰する、いわゆる同行の態度に不純なものがあり、それが習慣づけられたが故であらう。

「如来の作願をたずぬれば 苦悩の有情をすてずして

廻向を首としたまいて 大悲心をば成就せり。」

この和讃こそ、最も大悲の何たるかを示されたものである。大悲の大悲たるゆえんは廻向にある。即ち如来は、その一切を六字の不行として衆生に廻向したまうことによつて、救いを成就されるのである。大悲心とは、廻向を首とする。首とは、生命である。廻向を生命としてのみ大悲である。

しかるに、この如来の一切を、衆生の上に廻向成就したまうことを忘れて、大悲をただ、御理解と解し、御同情となし、更に、罪悪に對する寛容、遂には、罪悪に對する放縱性の認容、如来と凡夫との妥協、自己弁疏等に用いられるに至れば、大悲は盲目的なる母性愛と選ぶことなく、衆生の迷妄顛倒を、迷妄顛倒として根本より自覚せしめたまうべき衆生生活の本尊も、かえつて衆生の生活をして深き眠りに陥らしむる甘美なる麻醉薬となりおわるのである。

これ真に大悲を大悲として受領せるものでなくて、我の心が、大悲を弄び、甘き阿片の陶醉境に、如来及び自己を見失わんとする、恐るべき迷妄である。

如来は大悲であると共に智慧である。智慧光によるが故に、我等衆生の現実の相は、根本より照破せられて、必墮無間の相を暴露するのである。そこには、寸毫の妥協もなく、分厘の仮借もなく、過去久遠より尽未来際に至る罪悪生死の全貌を深信せしめて、一切の自力はからの雑音を封じきるのである。しかも無蓋の大悲は、その無有出離之縁のありたけを、光明の懐に摂取して、救いきるのである。

しかして、かかる救済のすべては、如来の絶対価値を、南無阿弥陀仏の不行として、衆生の無功德、必定無間底に、廻向成就することによって成立するのである。

まことに大悲とは廻向心である。めぐみである。限りなく与えんとする心である。如来のすべてを限りなく廻向したまうが故に、その回向顕現によつてのみ、大悲の御めぐみを体感するのである。

無限の力

大悲に生きる者は如来の生命を恵まれて生きる。春の温きめぐみは天地のすべてを育てて、芽を出し、花を咲かしむるが如く、一切衆生の我執、我慢、邪見、かたくなな煩惱の氷を静かに溶かしつつ、純に如来に帰命せしめて、その菩薩行を成就したまうのである。

「令諸衆生 功德成就」……諸の衆生をして、功德を成就せしむ……法海に、一仏事成就せられ、念仏の華咲き、白道現われ、三宝出現する等、いやしくも仏の道の生きるところ、全てこれ如来大悲の表現にほかならないのである。

「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。」

悪人愚者において厚き大悲は、一切衆生の苦悩を如来の苦悩と感じたまひ、一切衆生の迷いをば、自らの責任となしたまうのである。一切衆生の業苦を荷負して、若ん生者の誓いをたて、長時永劫に願行成就せんとしたまう大悲の御ところに帰るとき、我等の生活は、自力作善の世界より、他力報恩行の生活へと展開し、全我をあげて如来に捧げて生きる自由と法悦の信心海に一味となる。

我等の現実、限りなき苦悩に充ちている。我等のすべては罪悪煩惱に満ちている。我等の生活は業報の網に縛られている。かかる現実において、静かに大悲の御心に帰り、大悲の信心海に帰入する時、そこに無碍の一道を発見せしめられるのである。まことに大悲こそは信心海そのものである。

大悲とは純粹至純なる真実そのものである。衆生の五臓六腑に徹して、これを覚まし、これを生かし、転迷開悟せしめんとする無限の力そのものである。無限の力なるが故に、一切群生を救いきつて、正定聚不退の菩薩たらしめるのである。

新たなる生命道

我等自身に慈悲はなかった。内観自証の世界に帰る時、小慈小悲すらなき我であった。しかるに、聖道より浄土へと展開する時、如来の大慈悲は衆生の信火となつて、衆生を救い育てて、仏道を成就せしめるのであった。小さき我のほからいによつて慈

悲心は誕生するのではなくて、一切衆生を超えたる普遍の大生命、即ち慈悲であつたのだ。如来心即ち慈悲なりとの浄土教的体験こそ、まことに正しく慈悲心を生かすものでなくてはならぬ。

ここにおいて、聖人の「しかれば念仏申すのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候うべき」との新しい生命道は開いて来た。如来の本願に生きることが、末通りたる大慈悲を生きたることである。如来の大悲によつて自利成就して、成仏の道を生かされる我等は、同じ如来の大悲によつて、利他の大行をも成就することを、得しめられるのである。まことに大悲こそは仏道の一切である。

転悪成徳

「信楽といふは、如来の……円融……の信心海なり。」

円融と云う文字こそは、まことに如来の信心海、他力の信心海を現わすに相應しい文字である。円融とはまどかなる意で、善根功徳の満ち満ちて欠けることなきを現し、融の字は、融通の融で、自由自在を現わす文字である。されば円融とは、如来の大善大功徳の絶対にして、衆生を救うに自由自在なるを現わせるものである。

聖人は御本典総序において、

「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」

と讃嘆せられたるを思う時、名号に内在する廣大なる至徳が、衆生一切の悪業を転じて、自然に徳と成す所の転成の妙用を、円融なる文字によつて表現せられたることを知ることが出来る。衆生救済の大用は、実に、如来のかくの如き円融なる徳の然らしめる所である。

天地の相

まことに宇宙間の一切は、何ものといえども抽象的に一物が孤立して存在するものではない。指一本の傷の痛みは、直ちに全身の痛みであり、心臓一つの病弱は全身の病弱であるが如く、口に摂る食物は単に口の食物ではなくて全身の栄養である。個人の問題はそのまま社会の問題であり、社会の問題はすぐ個人の問題である。そこには、決して全てから隔離され、抽象されたものは一物一波といえどもあり得ない。であるが故に、一人の問題は万人の問題であり、一人の解決は全体の解決である。天地の真相は何時もこの全体の動きによつて解決せられている。

川は流れ流れて海に入れども、海の水の溢れることなく、雨は天より降れども、天に雨の無くなることなく、人は食物を摂りにとれども、一物を滅せず、限りなく糞尿を流出すれども、大地に糞尿の山は出来ず、生れたるものは死すれども、屍骸が累々として地上幾千尺の層をつくらず、生々發展、草木は山野に茂れども、何ものをも増さず、動物の吐出す炭酸ガスは、草木によつて清められ、その吐出す酸素は、動物によつて吸収せられる。唯、天地は円融自在にして、全体の動きの中に永遠の寂靜を保ちつつ、無始無終に宇宙の相を莊嚴している。

業苦と本願

貪欲、瞋恚、愚痴の三毒、十悪五逆、八万四千の煩惱より外に造らぬもの、即ち衆生である。衆生はただ無明煩惱の中に限りなき流転を続けつつ、互いに殺し、互いに悪み、裁き、傷つけ、傷つき、生れて死に、死んで生れつつ、暗黒なる生死海を出現して、しかもそれを自らの力にては如何ともすることの出来ないものである。

かかる罪悪生死の暗、衆生の業苦より誕生せるもの、即ち如来の大悲本願である。具体全一なる法界においては、一切衆生の痛みは全体にてまします如来の痛みであり悩みである。即ち大悲はここに生れる。一切衆生を荷負して、これを重担となしたまう大悲は、衆生の一切を直ちに、自らの苦悩、自らの責任となしたまうのである。

その大悲によつて生れ、成就したる南無阿弥陀仏の大行は、衆生の苦悩、罪悪生死等を除いては一切の意味を持たぬものである。生死海に対する浄土、罪悪に対する功德、苦悩に対する大楽、如来大願の施設の全ては、衆生の一切の浄化救済より外に意味を持たぬものである。

氷と水

されば本願の救いを明確に説ける鸞師の教説は、この意味を最も鮮やかに顕わされたるものである。和讃に曰く、

「本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ。」

如来の本願は円頓一乗である。時を隔てず、処をかえず、信ずる一念に三世の逆悪を転じて、完全に聖火に燃やし、煩惱と菩提と、体に二つなきを信知せしむるのである。まことに、逆悪をそのまま撰取して、大願業力の自然の大用によつて、煩惱を菩提たらしめ、生死そのままを涅槃たらしめるのである。

「無碍光の利益より威徳広大の信をえて

かならず煩惱の水とけ すなわち菩提の水となる。」

煩惱の水を善にすることによつて菩提を成就するのでなくて、煩惱の水は、如来智慧光の力によつて、解けて菩提の水となるのである。しかして、かかる本願力の自証こそ、「信」そのものである。されば信の世界においては、煩惱は更に重大なる意味を持つて来る。

「罪障功德の体となる 氷と水のごとくにて

氷おおきに水おおし 障りおおきに徳おおし。」

かかる煩惱業障に対する大胆なる断定は、如来なくして、大信なくして沙汰さるべきではない。しかし、大信の天地においては実に、氷多くして水多く、煩惱業障多くして功德多き、不可思議なる価値の創造を、讃嘆せざるを得ないのである。かかる不思議なる円融無碍は、名号の海水の自然の妙用である。

「名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず、

衆悪の萬川帰しぬれば 功德の潮に一味なり。」

大海に、如何に犬猫の屍骸を流すも、濁流をそそぐも、ついに大海を汚すに由なく、一切を浄化するが如く、如来の大悲大願の海水、名号不思議の大海に、煩惱衆悪の万

川衆流帰すれば、転じて功德の潮に一味であり、智慧のうしおに一体となる。これ全く、名号に内在する絶対功德の大用の然らしむる所である。

真如海

名号不思議の大海に以上の如き転悪成徳の妙用あるは、実に名号そのものが、真如法性に依因して成就され、本願海は直ちに真如海なるが故である。されば行巻には、「斯の行は、即ち是れ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。」

と説かれてある。南無阿弥陀仏は、一切の善法を摂取し、諸の徳本を具有し、極速円満に欠くることなきは、真如そのものの絶対善を内具するが故である。されば「真如一実の功德宝海」と言われる所以である。真如自然の大用でなくて、何で円融無碍なることを得よう。真如そのものの意味を本願を通して知ることが、即ち、救いを信知することである。善悪、浄穢によつて差別をつけられないで、善悪、賢愚、浄穢を一如に摂取して、ありのままを浄化し聖化するは、全く名号に内在する真如の徳の然らしむる所である。

円融

一悪といえども、その波紋の及ぶ所、その行方をつきとめることは出来ない。駟も舌に及ばず、一度発せられたる一言の悪は、千波万波の波となつて拡がつて、四頭だての馬車はおろか、何ものを以て追うも、これを取り返すに由はない。いわんや、念々八万四千の煩惱をやである。しかるに、本願智慧光の御はからいによるが故に、一切の悪は転じて大善となり功德となる。これ「円融」なる大智海の風光である。この円融なる天地の呼吸なくして、どうして安らかな生活があり得ようぞ。

如来本願海は全一なる世界である。この全一なる世界には人間のはからいほものを言わない。しかるに、仏智を疑惑するが故に、如来本願の自然の妙用を知らず、水油、相逆らうて、邪見となり、我慢となり、自力によるが故に、限りなき罪悪生死の迷路に行き詰まるのである。

本願を信ずる者は如来の智慧に生きる者である。正しく如来に信順するが故に、個我のはからいをすてて、その全一なる御はからいに任せ、本願自然の転成に托して、如来円融の大善大功德を領得して生きる。

大悲に相応して柔軟心に住し、生死に随順して苦悩を逃避せず、静かに全一なる如来本願の願意を念じて、全我を投托し、廣大なる恩徳を報じ、罪悪深重を懺悔して合掌に生きる。まことに懺悔と報謝こそは、自力をすてて如来に帰し、円融至徳の名号を生命として生きる者のすべてである。如来本願に帰る時、一切の罪悪、苦悩は、彼岸の徳に転じられ、円融にして自在なる大道を行歩することが出来る。かるがゆえに人生は矛盾にみち、矛盾の中にいつつも、しかも信心の行者がよく平和と統一とを保つことが出来るのは、この故である。

無碍

既に円融なる文字について信楽の真意をうかがって来た。次には「無碍の信心海」について信管せんとするものである。

無碍とは一体如何なる意味であろうか。

憶うに人生の現実には、有碍であり、不自由であり、矛盾である。その中において如何にして無碍なることを得るのであろうか。經によれば無碍とは、

「十方無碍人、一道より生死を出でたまえり。一道とは一無碍道なり、無碍とは謂く生死即ち是れ涅槃なり」と知るなり。この如き等の入不二法門は無碍の相なり」

(華嚴經)

と云われてあるが如く、十方無碍人、即ち十方諸仏は、ただ一道より生死を出でるのである。一道とは一無碍道である。然らば、無碍とは何であるか。曰く『生死即涅槃』を証することである。生死と涅槃、煩惱と菩提と、二つあること無しの不二法門を証する仏の絶対知見をさして、無碍道と言われるのである。

しかしながら、迷悟不二、淨穢不二等の不二法門は、いわゆる聖道門であつて、生死即涅槃の説は、我等凡夫にとつては、畢竟用なき単なる哲学であつて、いたずらなる戲論にすぎない。人生の現実是我等にとつてあまりにも有碍であり、苦悩であつて、業苦の絆、断つに由なく、ただいたずらに生死流転をくり返しているではないか。生死即涅槃と知るとも、煩惱有漏の業風さかまきおこるに、何ぞ痛みなきを得よう。

古来の聖者の悩みがそこにあつた。

念仏道

しかるに親鸞聖人は歎異抄第七章に、

「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれ如何とならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなき故なりと云々。」

と高らかに無碍道を現実生活の中に叫んでいられる。これまことに、聖人の念仏生活の真面目を赤裸々に物語るものでなければならぬ。我等は如何に領解すべきであらうか。

無碍光

天親菩薩は浄土論において、

「世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安樂国に生れんと願いたてまつる。」

と告白せられた。阿弥陀仏とは、尽十方無碍光如来である。聖人は常に「帰命尽十方無碍光如来」という十字名号を本尊として拝まれた。

先に華嚴經明難品の御文を出したが、これは行卷他力論において引かれたる、曇鸞大師の『論註』の文の中にあるものである。すでに生死即涅槃は仏の絶対智見であると言つた。即ち彼岸の如来は、実に、生死即涅槃を証して正覚成就したまえるものである。生死即涅槃の無碍道こそ、法蔵菩薩の成就したまひし道であつて、やがてその絶対智が正覚の内容なるが故に、無碍光如来とよばれるのである。即ち無碍道とは、

如来の自内証をあらわせるものであり、如来の真実功德相でなければならぬ。しかれば、その如来の絶対功德たる無碍道は如何にして我等のものとなるのであるか。

無碍の大用

如来の智慧光は、やがて生死界を照破して衆生を救い、自覚せしめる。しかして、そこに無碍の大用をおこすのである。聖人が唯信房につかわされた御消息に、

「無碍光佛は、よろずのもの、あさましき、わるき事には障り無く、たすけさせたまわん料に、無碍光佛と申すと知らせたまうべく候。」

とあり、即ち一切衆生の如何なる悪業にも障りなくたすけたまうが故に、無碍光仏と言われるのである。和讃には、

「光雲無碍如虚空 一切の有碍にさはりなし

光澤かふらぬものぞなき 難思議を帰命せよ。」

と讃嘆せられた。和讃のこころは、光雲とは、光雲の如く、雲は天を覆い、雨を含みて一切のものを潤おすが如く、如来の光明は一切衆生をおおい、法雨となつて衆生を潤したもうが故に光雲と言うのである。その光明は「無碍如虚空」無碍なること虚空の如し。「一切の有碍にさはりなし。」有碍とは衆生の悪業煩惱のことであり、「さはりなし」とは如来の光明は一切衆生の如何なる悪業煩惱にも障碍されることなきを表わされたのである。

以上の如き説は、生死即涅槃を証つて正覚成就したまへる仏の絶対智が、南無阿弥陀仏と具体化されて、衆生の上に廻向顕現して、この無碍の大用となることを説かれたのである。

有碍

一切衆生の現実是有碍である。生死の悩み、悪業に束縛せられて、苦より苦に入り、暗より暗に彷徨うていつつ、しかも、衆生自身に自らを救う力を持たぬものである。

ここに念仏道がある。念仏道こそ衆生の救われる唯一の道でなければならぬ。しかるに、多くの念仏者たちは、称名の声の中に埋れつつも、なお無碍の道味を体得することなく、「後生の問題と、此世の問題とは違う」などと言いつつ、ひそかに、だらしなき生活をば省みることなく、功利的に極楽だけをつかもうとしたり、或は「このままのお助けが有難い」などと、動物的本能の満足を信仰とあやまり、「どうもならぬのが凡夫」と、始めから腰をすえて、その上に如来の偶像をひきよせて、妥協し、浅ましい本能生活の言い訳を、大悲の上に求めたり、或は、過去の感泣の涙を唯一の立場とし、その上に信心の証を求めて、勝手に教法のぬき食いをして、古ぼけた化城を更に固めんとする。かかる醜悪な嫌な世界は、なぜに生まれるのであろうか。そこには決して無碍道はありえない。

彼岸の招喚

億うに、かかる甘美なる毒素に酔うて無礙なることが出来ないのは、真実に如来の招喚を聞かぬが故である。大悲を弄んで、仏智にさめぬがためである。

如来は冷徹にして厳肅なる真実明である。愚痴なる母性愛ではなくて鋭き慈父である。寸毫微塵も、これをごまかし、盲にすることをゆるさぬ鋭き光であり、全てを映さざるなき大円鏡智である。かかる名号の慈父は絶対必然の権威をもって、彼岸に招喚するのである。我らはその招喚に覚めねばならない。我らは温き大悲光明摂取の懐に帰ろうとして、名号の慈父に逆らってはならない。名号の父に背いて、母の懐に安価に眠ろうとすることは、おそるべき墮落である。

悲母の懐に地獄一定の自覚はない。彼岸より人生に、如来より衆生にと、働きかける無碍の智慧光のみが衆生の全てを覚まし、転じ、破り、廻心せしめて、その真実の相を知らしめるのである。まことにこの厳肅にして絶対なる如来の招喚の前に、一言の言うべき言の葉があろうか。微塵の妥協的生温さが許されようか。そこには、唯、如来招喚の声のみが生ききる。衆生の全ての迷妄を迷妄と知らしめ、如来の円融無碍なる功德のみが、ものを言うのである。

如来は一切の悪業煩惱を願力によつて、転じて徳と成すが故に、不断煩惱得涅槃の無碍道となつて体得せられる。

ここにはじめて、如来の無碍道はそのまま衆生の上に活現して、衆生の無碍道となるのである。

無碍道

ここにおいて、念仏者は、唯一絶対の無碍道を獲得したと言われるのである。「念仏者は無碍の一道なり。」、外なる民間常識者流の生み出せる、天神地祇の偶像も、悪魔外道の脅迫も、ついに真仏の智剣に敵すべくもなく敬伏し、内なる罪悪業報の鉄鎖も諸善の執縛も、この大鉄槌に打ち砕かれて、ただ如来自然の大道が、行者の上に打開されるのである。

「信楽というは、如来の・・・無碍の信心海」である。

疑蓋

信楽の二文字についてその真意を頂戴して来たが、以上に於いて、

「信楽と言うは、則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。」

との聖釈を大体にすませた。眼を次に移せば、祖聖は、次いで、

「是の故に疑蓋間雑あること無し。故に信楽と名づく。」
と仰せられる。疑蓋とは「うたがい」である。蓋は、「ふた」という字、確かに疑いは心になされた蓋である。

「月影の至らぬ里は無けれども、蓋ある水に影は宿らず。」

疑いは、閉ざされたる心の扉であり、蓋をされて暗き心の相である。しかるに、真実の信心海には、疑蓋は間雑らない。疑いなきが故に信楽と言われるのである。何故なれば、真実の信心は、凡小自力によつて作られたものに非ずして、如来の、満足、大悲、円融、無碍の信心海なるが故である。

如何に、暗雲低く垂れ込めようとも、天真の月に曇りがあるのではない。大地に群がる雲である。人間は、長い間、大地に生きる人間の胸に、至純絶対の大信心を尋ね

て来た。しかしそこには、底知れぬ不安疑惑が群がり起るのみであった。多くの者は、そこにひそむ煩惱我執の正体をつきとめ得ず、煩惱のなす魔術を信心とあやまつて、底深く巢くう疑惑すら知らないのである。されば、信心獲得をあせる余り、自力の世界において、疑いなきを誇るも、あるいは疑いを懐いて苦しむも、共に、未だ他力の大信を得ざる相である。

信心

求道心なく、煩悶なく、驚きを持たざる者に疑惑はない。一度求めて出発した者には、一の疑いは、二の疑いを生み、二は四になって、ついに胸中疑いをもつて満たされるであろう。

しかるに、かかる疑惑は、畢竟、自力妄想の所作であり、自力によつて信心を建立して、如来にすがらんとするものである。かかる努力はそれ自体疑惑を深めつつ、ついに絶望に陥るであろう。しかして、かかる自力の絶望に至つて、ついに転回して如来久遠の本願海に帰入して一切の疑いは破れ、信楽の二字は衆生の煩惱海より去つて、南無阿弥陀仏それ自身の内容となり、しかも如来本願の廻向によつて、純なる帰命の世界に出で、如来の大信心海に更生するのである。されば、信楽こそは如来の大信心海そのままの廻向なるが故に、

「是の故に疑蓋間雜あることなし。故に信楽と名づく」と言われるのである。

信の体

然れども信楽は、唯、彼岸の如来の胸中にあるのではない。現実生死の唯中にある衆生の合掌の胸中に在るのである。衆生の南無帰命の一心そのままが、信楽でありつつ、しかも如来成就の信心なるが故に、聖人は次に、

「即ち利他廻向の至心を以て信楽の体と為るなり。」
と仰せられるのである。信楽は如来の至心、真実を体としてのみ成就せられたのである。至心とは、本願の体である。信楽とは、本願の相である。如来の真実心より生えぬいた信心なるが故に、真実信心と言われるのである。真実は限りなく与えんとする心である。廻向は如来の生命であり、利他せんとするは、如来大悲の全てである。故に「利他廻向の至心」と言われ、その利他廻向の至心を体としてのみ、如来の真実信心は成就せられたのである。

内観自証

以上によつて、我らは我らの胸中に発起する信心は、それが真実なるものである限り、如来廻向の信心であり、本願そのものの内容であることを知った。聖人はただ本願の宗教を説ける人ではなくて、本願の宗教を生きた人であり、大悲廻向の信心を身をもつて領得し、恵まれて生きられた方であった。今や、一代仏教の点晴とも言ふべき「信」の世界の開顕を聞くに当たつて、次に、ほとんどの求道者にとっては意外なる文字を見出さねばならない。即ち、

「しかるに無始従り己来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて清浄の信楽なし、法爾として真実の信楽なし。」

との告白である。これ即ち正しく聖人の体験底の叫びでなくてはならない。多くの求道者は、如来本願の大信心を獲得すれば、その内観の世界において水晶の如き清浄と、純粹無雜なる真実とを発見するものの如く考えるのである。されば、いたずらに甘美なる陶醉をもつて信心となし、安価なる一時的感激を以て信楽とあやまり、そこに嫌悪すべき化城に止つてしまふのである。しかるに組聖は、如来廻向の大信心の天地において、一切衆生の内的運命と、現実の相を発見して、

「然るに無始従り己来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽なし、法爾として真実の信楽なし。」

一切群生海

祖聖にあつては、信心とは如来の智慧を廻向せられることであつた。寂靜の楽より流れて来る一道の光明は、千古の暗室たる衆生の胸中の疑惑の扉を開いて、その暗黒を照破するのである。

一切群生は、自然の母の懐をはなれて、遠く六道の旅路にありつつも、なお、その無明の遙かなる旅路にあることさえ知らぬものである。まことに、無明は無明を知らず、煩惱は煩惱を知らず、迷いは迷いを、知らぬものである。一切群生は、はてしなき無明海を出現しつつも、しかも自らの運命について知らぬが故に、果てしなき流転を続けるのである。

祖聖は今や、この一切群生を一体に同化しつつ、内に如来の智慧光によつて眼を開かれ、現実の相に徹し、その現在の、底知れぬ生死煩惱の深信によつて、一切衆生の内的運命を自己自身の胸中に諦観せられるのである。そこに初めて、衆生の無始久遠の生死の因縁は、明らかに照し出されるのである。

即ち聖人の胸中に輝き出でたる信楽の光は、「無始従り己来、一切群生海、無明海に流転し」と、現実の果相を通して、無始久遠の過去の流転相を知られるのである。我らは、ここにおいて、善導の二種深信における、

「一には決定して深く、自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、眩劫より己来常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。」

との告白を思い出さずにはいられない。眩劫己来、常没、常流転の衆生の現真相は、今、「無始従り己来一切群生海は無明の海に流転して」と祖聖にあつて体験せられたのである。

智慧光

真に救われるとは、真に知ることである。無明海にあつて無明海を知るものは、無明ならぬものである。眩劫己来、無明流転を続けたりとの信知は、無明ならぬ如来の智慧光によつて、救いきられたる、信一念の内容でなくてはならない。

「昉劫多生のあいだにも 出離の強縁しらすぢりき

本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし。」

出離の強縁を信知した時、出離の強縁を知らざりし過去が明らかにせられるのである。昉劫久遠の無明をつきとめないで、どうして真に三世徹貫の救いと自覚が我がものとなろう。

釈尊は、すで菩提樹下において、法身常住の智慧光によつて、衆生の生死流転の相を、惑、業、苦の連鎖無窮の相において発見せられ、その根本無明を、智慧光によつて、亡ぼして成仏せられた。真理の光は、流転の根本をつきとめて、その根本の因を断滅するのである。まことに如来の智慧光に生きる菩薩にあらずしては、十悪五逆、やがて、根本微細なる無明の因を、突き止めることは出来ないのである。

惑業苦

まことに一切衆生は、無始昉劫よりこのかた、

「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて」

と、流転、沈没、繫縛の中にあえぐ者である。衆生の流転は、その根本を無明に発するものである。無明それ自体、実態を有するものではなくて実に智慧なきことである。暗であり、惑であり、痴である。さればこの無明によつて出現したる衆生の世界は無明海である。自ら作りたる無明海に流転するものである。無明即ち惑によつて生れたる衆生は、請有輪に沈み迷えるものである。諸有とは二十五有の迷いの世界である。無明海の量的な相を諸有、二十五有と名づけるのである。輪とは、車輪の廻るが如く、實際なきことである。無明は、やがて業となり、業はそれに相応する諸有を出現して、その出現したる諸有に沈み、迷い、囚われて、出ることが出来ないものである。しかして、かかる迷いの三界は、苦悩に充てるものである。衆苦輪、即ち車輪の廻るが如き、はてしなき無限の苦悩に繫縛せられて出る期を知らぬのである。

かくして、惑は業を生み、業は苦を伴ない、苦は更に惑を深め誘い、業苦果てしなき永遠の流転を続けるのである。

かかる生死流転の衆生にどうして眞実信心があろう。故に、

「清浄の信楽なし。法爾として眞実の信楽なし。」

との断定をせられたのである。しかして、かかる清浄眞実の信楽なきことの深信決定が、清浄眞実の信楽を如来の本願海において発見せしめるのであり、逆に如来廻向の信楽に光る智慧光が、かかる衆生の生死海の現実相を諦観せしめるのである。

衆生の現寶

親鸞聖人は、如来廻向の眞実信心の光に照破せられて、一切衆生久遠の内的運命を自己において発見して、

「しかるに無始徒り己来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽なし。法爾として眞実の信楽なし。」

と告白せられた。祖聖は更にこれに次いで、

「是を以て、無上の功德、値遇し難く、最勝の淨信獲得し難し。一切凡小一切時の中に、貪愛の心、常に能く善心を汚し、瞋憎の心、常に能く法財を焼く、急作急修して頭燃を灸ふが如くすれども、衆べて雜毒雜修の善と名づく。亦、虚仮詔偽の行と名づく。真実の業と名づけざるなり。此の虚仮雜毒の善を以て、無量光明土に生ぜん」と欲する、此れ必ず不可なり。」

と説かれた。これまことに衆生現実のありのままの相である。我らは今、靜かに祖聖のこの断定の真意を聞かんとするものである。

遇得の難

「是を以つて無上の功德、値遇しがたく、最勝の淨信、獲得しがたし。」

これ、無上の功德たる六字大行の救いに値遇しがたく、他力最勝の清淨の信心を獲得することの難きを明らかにせられたのである。

まことに南無阿弥陀仏は無上の功德である。純粹至純の絶対善である。この六字大行に値遇することは難い。すでに、聖人は本典総序において、

「噫。弘誓の強縁は多生にも値いがたく、真実の淨信は億劫にも獲難し。偶々行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」

と讚嘆し、更に、

「こゝに、愚禿釈の親鸞、慶ばしき哉や。西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に、遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして己に聞くことを得たり。・・・斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり。」

と仰せられた。無上の功德に遇うとは、如来真実の教法に遇うことである。真実の教法に遇うことなくしては如来にあうことは出来ない。しかしてかかる「難遇」「難聞」の驚きは、仏とも法とも思わぬ者にあるのではなくして、真実の教に遇い、名号の無上功德を獲たる者の「聞く所を慶び、獲る所を嘆ずる」真実信の慶びに具足する讚嘆の声であり、体験の告白である。

更に「最勝の淨信、獲得しがたし」と言われる。すでに大無量寿經の下巻において、「如来の興世は値い難く見難し。諸仏の經道も得難く聞き難し。菩薩の勝法・諸波羅蜜は聞くことを得るも亦難し。善知識に遇い法を聞いて能く行ずる。此れ亦、難しと為す。若し、斯の經を聞いて信樂受持せんは、難中の難、此の難に過ぎたる無し。」

と説かれてある。法を聞くことは難い。しかして法を聞いて行ずることは更にかたく、信樂するに至つては「難中の難、この難に過ぎたるはなし」である。

まことに我らは名号を聞信してのみ、他力の信心を獲得することの、如何に難中之難、無過之難であるかを如実に体験するものである。しかるに一面、念仏道は「易行道」と言われ「易往而無人」と説かれてある。何故に、極難信にして、しかも「易行道」と言われるのであろうか。

水火二河

しかるにこれに答えるに当たつて、内省における我らの現実を示して、

「一切凡小、一切時の中に、貪愛の心、常に能く善心を汚し、瞋憎の心、常に能く法財を焼く。真実の業と名づけざるなり」

と言われる。まことに衆生の身、口、意の三業は、真実の業ではあり得ない。つきつめて考察する時、善と見せかけても雑毒雑修の善であり、虚仮や詔偽の行である。たとえ忙しく、頭髮に付いた火をもみ消すほど急作急修しても、真実とは言われない。何故なれば、一切凡小悉く一切の時において、貪愛と瞋憎の心が善心を汚し、功德を焼くが故である。善導はすでに二河白道において、貪愛と瞋憎とを水火二河に喩えられた。貪愛…貪欲の心なるが故に、瞋憎―瞋恚の心をとまなうのであり、貪愛―愛の心なるが故に瞋憎を伴うのである。かくて貪愛と瞋憎とは相即しておこる二河である。この二河こそは常に、中間の白道をあるいは潤し、あるいは焼いて絶える時がないのである。

われ等はしばしば、この貪瞋二河において誤りをくり返すのである。即ち貪瞋の心は、自己にとつて苦しい心であり、その結果において、自他を傷つけるが故に、少しく生きることには忠実なるものは、瞋恚そのものをよいとは思わない。否、それすら「瞋恚の心をおこしたのは悪いが、かくの如くあらしめたのは、他に悪い者があるからだ」といった具合に、その原因を他に求めようとする。瞋恚においてすでに然りである。貪愛の心に至つては、ついにその正体を見せぬのである。即ち、機嫌よくニコニコせる我を見て、さも善人にでもなつた如くに考えやすい。しかしニコニコ顔は決して善人になつたのでなくて、己の貪愛の満足せる相である。五欲の満たされた幸福の日、即ち順境こそ水の河である。されば真に如来智慧光の照破なくしては、雑毒虚仮の雑善を真実とあやまり、不実詔偽の悪業を善根となして、より深き迷妄へと沈むのである。

邪見

衆生は如来真実の信心に目覚めない以上、かくの如く、雑毒雑修の善、虚仮詔偽の行を真実と誤り、それを彼岸に廻向して救いの道を求めようとするのである。憶うに、他力の信が易行易修であるにかかわらず、「最勝の淨信、獲得しがたし」となり、「難中之難 無過之難」となるのは、実にこれが為であろう。されば祖聖は次に、

「此の虚仮・雑毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲する。此れ必ず不可なり。」と断言せられた所以である。

自力とはかくの如く「此の虚仮雑毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲する」ことである。憶うにこの雑毒虚仮の善を彼岸に廻向して生ぜんとするは、貪愛瞋憎の現実、雑毒虚仮を雑毒虚仮と知らぬが為である。しかしてそれを知らしめぬものは何であるか、これ即ち、貪瞋の裏にかくれたる「我」ではないか。己の貪欲のみを主張して譲らぬものは、即ち「我」である。

されば、正信偈に、

「邪見憍慢の悪衆生、信楽受持すること甚だ以て難し。難の中の難、これに過ぎたるは無し。」

と言われる所以であろう。邪見憍慢とは己を知らぬものである。己を真に知らぬ限り、自力の離れようはあり得ない。されば、今祖聖が「一切凡小、一切時の中に貪愛の心、常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を焼く。急作急修して、頭燃をばらうが如くすれども、衆て、雑毒雑修の善と名づく。亦虚仮諂偽の行と名づく。云々。」と告白せられたるは、全く如来廻向の信心の智慧によつてなされたる自証の世界、信心海に見出されたるありのままの相である。他力の信心の光によるが故に、「此の虚仮雑毒の善を以て無量光明土に生ぜん」と欲す。此れ必ず不可なり。」との価値判断が成立し、自力を粉碎して余す所なきに至り得るのである。

大悲廻向

かくの如く、自力廻向の心に鉄槌を下せる祖聖は、つづいて、

「何を以ての故に、正しく菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、疑蓋雑ること無きに由りてなり。」

と、菩薩の無限の願行の上に、真実の業を肯定せられた。真実なるが故に、疑蓋を雑入しないのである。真如界より生死界に還来穢国せる菩薩の願行に、何で不純虚仮を混雑しよう。憶。真如界にありつつ、生死界に従果向因せる菩薩は、無限に煩惱の群生の上に真実の願行を廻向成就してやまぬものである。その願行こそ、やがて如来の生命であると共に、衆生の生命である。南無阿弥陀仏の大方の本質であり、生命であり、願力である。この菩薩永劫の真実より外に「信心」はあり得ない。

されば、

「斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無碍広大の浄信を以て、諸有海に廻施したまえり。是を利他真実の信心と名づく」と。

真実の信心とは、雑毒虚仮の衆生心を技巧して、彼岸に差し向ける心ではなくて、彼岸の如来より、現実の我らに廻向せられる一切である。信心そのものが如来の大悲心そのままの廻向である。仏心そのものなるが故に「報土の正定の因」となるのである。ことより外に、大悲はあり得ない。大悲は、永劫に無限に苦悩の群生海を悲憐してこの浄信を廻向し、その信心海に、十悪五逆を照破し、摂取して止まぬのである。